

アーサー・コナン・ドイル作
伊豆野 良江訳

クランバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izuno

シャーロック・ホームズの活躍がないドイルもの

コナン・ドイルと聞けば、誰でもシャーロック・ホームズを思い浮かべるだろうだが、実は、さまざまなジャンルの本を書いている。映画「ジェラシック・パーク」「ロスト・ワールド」などでおなじみのSFもあれば、冒険小説や歴史小説も多い。ホラーやミステリー物もあり、今回私が新訳として取り組んだ「The mystery of Cloomber」はそのひとつである。

物語は、西イングランドの荒涼とした地を舞台に、クランバ館の主人の謎を追う物語だ。男には秘密があり、常に何かに怯えているが、それが何なのかはわかりそうでも一向に明らかにされない。読者はじれったい思いでページを繰るが、そのときはもうどっぴりと物語にはまっている。思わせぶりの表現で引っぱるだけ引っぱり、最後の最後に手の内を明かすというこの手法は、さすがドイルと思わせる。

今回、新訳をするにあたって心がけたのは、せっかく新訳をするのだから、今までの訳とはまったく異なった味のものにしたいということだった。といっても、奇をてらうのではなく、本をあまり読まない人々にも、抵抗なくその世界に入っていけるような訳をめざし、それなりの工夫を試みた。ドイルの文は長くて、もって回った言い方が多い上、使用している語句がやたらに難解である。「今の時代にドイルが書くなら」という想定で、できる限り平易な言葉に直し、長い文章は潔く二文、場合によっては三文に分けた。そうしたからといって、文学的な価値が下がるわけではないと確信しているし、なにより多くの若者に読まれれば訳した意味があると思う。翻訳では Project Gutenberg に収められているテキスト、それら「Hesperus Classics」の「The Mystery of Cloomber」を用いた。（なお、本章の末尾に新旧訳の一部を掲げたのでご覧下さい。）

（伊豆野良江記）



（The Mystery of Cloomber A
Great Stone Embedded in the
Mud, I Hurlled It Over :
<http://www.allposters.co.jp/>

第一章 ウェスト家、エディンバラからの移住

わたしは、ジョン・フォザーギル・ウェスト。アンドリユー大学法学部の学生だ。この話を公表するにあたって、事実をありのまま簡潔に述べることだけを心がけた。

べつに文学者として成功したいという野望はない。だから文章にこつたり、出来事の順序を入れ替えたりして、事件を面白おかしくするつもりもない。この事件を少しでも知る人々に、わたしの話が偽りでないことを認めてもらいさえすればいい。それがかなうなら、これがわたしの最初で最後の著書になっても、十分満足だ。

当初は、自分の体験以外の部分は、人づてに聞いた話の中から信頼できそうなものをもとに、出来事を順に記していくつもりだった。けれども、親切な友人たちのおかげで、もっといい方法を見つけたことができた。この事件に関して入手したさまざまな手記、そして「Bヘザートン少将をよく知る人々からじかに聞いた証言を記すことにしたのだ。そのほうが労力もかからず、読者にももっと満足してもらえるにちがいない。

掲載するのは、以前クルンバー館の御者をしていたイズレール・ステークスと、エジンバラの王立内科医協会会員で、現在ウイグタンシアのストレンラーで開業医をしているジョン・イースタリング氏の証言。また、故ジョン・バーシア・ヘザーストーン氏の日記を抜粋して、第一次アフガン戦争末期の一八四一年秋にツール谷で起こった事件とデラダ峡谷での戦闘、そしてグーラフ・シャーという人物の死について述べようと思う。手記と手記の隙間を埋めることだけがわたしの仕事で、作家というより編集者といったほうがふさわしいし、この本も供述書集に近いだろう。

わたしの父はジェームズ・ハンター・ウェストとあって、東洋学およびサンスクリットの著名な学者で、今日でもその世界で一目置かれている。父は故サー・ウィリアム・ジョーンズの意志を継いで、古代ベルシャ文学の素晴らしさを初めて世に紹介した。また、ハーフィッツやアラドーウディン・アタルの詩の翻訳書を出して、ウィーン・フォン・ハマーブルグストール男爵をはじめ、ヨーロッパで一流の批評家の絶賛を博した。一八六一年、「東洋学研究」誌の一月号で、「エディンバラの有名な学者であるハンター・ウェスト氏」として父のことが掲載されたことがあった。よほどうれしかったのか、父はこの記事を切り抜いて、家に代々伝わる記録書の中にしまいこんだものだ。父は弁護士になるべく教育を受けてきたが、肝心の仕事はそっちのけで、先の研究に打ち込んだ。依頼主がジョージストリートの事務所を訪れても、父はそこにいたためしはなく、弁護士会館の図書室の一番奥にこもっているか、哲学協会の会館でかび臭い写本に夢中になっているかのどちらかだった。十九世紀のスコットランドの厄介な事件に関わりあつより、紀元前六世紀に提唱されたというマヌ法典のほうがよっぽどおもしろいと思っていたのだろう。

父の学問への造詣が深まり、いよいよその名声が高まる一方で、仕事のほうは開店休業状態で、当然財産も底をつくようになった。エジンバラの大学にはサンスクリット語

の教職はなく、父の唯一の財産である博識を生かせる仕事は一つもなかった。

生活は、ますます苦しくなるばかり。父の大好きなペルシャの詩人フィルドウスイーヤオマル・ハイヤームの金言や警句を口にしては、自分を慰める毎日だった。そんなとき、幸運にも父の異母兄弟のウィリアム・ファリントッシュという人物が、手を差し伸べてくれたのだった。

その伯父はウイグタンシア州のブランクサムに住む大地主だった。といっても、その州自体が荒れ果てた不毛な地だった上に、所有地はひどく痩せた地域で、広大な割には土地の価値は低かった。それでも、独り者の伯父の生活費は高が知れていた。あちこちから入ってくる家賃収入や、荒地で育てたガロウエイ馬を売った利益などで、地主にふさわしい生活もできたし、銀行には相当な額の預金さえあった。

わたしたちの生活が楽だった頃には、この伯父からめったに便りはこなかった。ところが、ほとほと困り果てたまさにそのとき、思いやりに満ちた、救いの神のような手紙が舞い込んだのだった。「自分は片肺が少し前から悪化している。ストレンラーのイースタリング医師からもっと温暖な気候の地で療養すれば、あと数年は生きられると言われたため、南イタリアへの転地を決めた。については留守中ブランクサムの家に住んではもらえないだろうか」という内容だった。管理人になってもらえば、生活に心配ないだけのお礼をするつもりだ、とあった。

母は数年前になくなり、家族といえはわたしと父と妹のエスターだけだった。わたしたちは、このありがたい申し出を二つ返事で引き受けた。手紙を受け取ったその晩のうちに、父はウイグタンに出発。わたしとエスターは、二つのジャガイモ袋に学術書を詰め、最低限の身の回りの品を持って、数日遅れでその後を追った。

付記..

光文社が「古典新訳文庫」と銘打ってこの半世紀以上も新訳がなかった古典ものの翻訳を開始してから（この十年ほど、新訳がいくつも現れてはいましたが）、どうやら新しい読者をつかんできたようです。

本『W&Mマガジンの出版翻訳』は新人発掘も刊行の目的にしています。翻訳者、エッセイストが本誌を根拠にして、ビジネス出版界の活躍の場を求めたり、ビジネスにかぎらずいろいろなことについて

コメント、新訳、またはそのおもしろいところを述べたりするのは、難しい問題ですが、今回はどうして、原文と旧訳、新訳を並べて（冒頭の部分だけで物足りないので）、読者の皆さんにじっくりと読んでもらいたい。新訳が容易でない文学活動であることがお分かりになるはずです。（藤岡記）

原文..

I John Fothergill West, student of law in the University of St. Andrews, have

endeavoured in the ensuing pages to lay my statement before the public in a concise and business-like fashion.

It is not my wish to achieve literary success, nor have I any desire by the graces of my style, or by the artistic ordering of my incidents, to throw a deeper shadow over the strange passages of which I shall have to speak. My highest ambition is that those who know something of the matter should, after reading my account, be able to conscientiously indorse it without finding a single paragraph in which I have either added to or detracted from the truth.

Should I attain this result, I shall rest amply satisfied with the outcome of my first, and probably my last, venture in literature.

昭和三十三年 新潮社 「クルンバの悲劇」 延原謙訳

この話を公表するに当たって私 セント・アンドルーズ大学法科の一学生たるジョン・フォザギル・ウェストは、つとめて叙述を簡潔に、ビジネスライクにと心がけたつもりである。

もとより私はこの一篇によって、文芸的な成功をおさめようとする野心があるのでもなく、ましてや文章に綾をつけたり、事件の配列を巧みにすることによって、このいとも不可思議なる物語りにいつそう濃い陰影を投じようとする山気があるのでもない。ただ望むところは、本件の真相を幾分ずつでも知っている人たちに読ませてみて、私の文章が一言一句事実を曲げたり、あるいは書くべきことを書きもらしたりしていないことを、その人たちが心からは認してくれるようなものができさえしたら、それで満足のきわみなのである。

うまく行くかどうかは、書いてみなければ分からぬが、そうした唯一の小さな私のねがいの叶うようなものが出来あがったなら、生まれて初めてで同時にこれが最後になるであろうこの一小篇の世のなかへ出るのを、心しずかに待っているとしよう。

昭和三十三年 東京創元社 「クルンバの謎」 松原正訳

セント・アンドルーズ大学の法科の学生である私、ジョン・フォザギル・ウェストは以下の物語を公表するに際して、できるだけ簡潔にまた要領よくまとめようと努力した。

私はこれによって文学的な成功をおさめたいとも、文章表現に粹を凝らそうとも、さらにもた、さまざまな出来事を巧みに配列し直して、これから語らねばならぬ不思議な事件を誇張しようとも思わない。私のねがいはせいぜいのところ、部分的にこの事件に関係した人たちがこの記述を読んだ場合、事件の真相をかってに歪曲したり、削除したような部分はすこしもないという点を、確認してくれることである。

なかなか難しいことではあるが、万一この目的が達成できたとすれば、最初の、そし

ておそらくは最後になるであろうこの拙作の成果に、私は大いに満足することである。

平成十九年 東京創元社 「クルンバーの謎」 北原尚彦訳

セント・アンドルーズ大学の法科学生である私ことジョン・フォザギル・ウエストは、以下の記録を公表するに当たって、簡潔かつ実務的に記述するべく努めた。

私は文学上の成功を収めようというつもりもなければ、典雅な文章をかきたいと望んでもいないし、ましてや出来事の配列に技巧を凝らしたりして、以下の物語に濃い陰影を投げかけたとも思わない。私の最大の願いは、この一件についてなにがしか知っている人が私の文章を読んで、一言一句にいたるまで、真実に何も付け加えず何も削ってはいないことを、誠心より認めてくれることである。

その願いがかなえられたならば、最初にして、おそらく最後となる文学的試みの成果に、私は十二分に満足して心を安らげるだろう。